第12号
（4月）
2014年4月1日

七里ヶ丘こども若者支援研究所

それが社会参加だ

京都嵯峨野三千院

鎌倉市七里ガ浜東2－31－12
携帯：09072124055
メール：qq5656r9@happytown.ocn.ne.jp
発行編集責任者　滝田衛

多様で穏やかな交流ときずな、そして楽しい場づくりを

団長小幡沙央里さん　副団長永野亜由美さん・新舛秀浩さん

“こども若者応援団(研究所会員団体)”　　若手(20～30代)で2014年度スタート❣

3月23日、第12回こども若者応援団会議は2014年度の役員を表題の通り決定した。団長の小幡沙央里さんは塾教師そして養護施設ボランティア。地域への関心を高く抱き社会環境改善を強く願って行動している。「子ども達が来て、中高生が中心でやれるこども若者の交流の場づくりを実現したい」と希望を語った。永野亜由美さんは地元TI企業勤務で地域活性化を願い、創造空間という異業種交流に参画、先の講演会でいじめ被害体験をカミングアウト。「高校生が小学生に教えるような地域キャリア支援を実現したい」と語る。新舛秀浩さんは障害によるひきこもりを自認。「働いていない当事者性を主張しながら、多様な人たちと出会える場づくりを」と分け隔てない社会環境づくりを考えている。2名の男性龍崎明信さんと宮坂和彦さんも新たに役員に加わり頼もしい限り。幹事の川辺順子さん(当事者の親、NPOアンガージュマン昼食ボランティア)は「参加していく意義を感じ頑張ります」、山本陽子さん(元中学校長　子育てボランティア)は「若い人のパワーに刺激され、一緒に居るだけでうれしいです」と若者への橋渡しを願って参画してくれました。

広島・大正橋辺の開花を始めた桜

この1年のタカラ、世代を超えた出会いと交流

昨年4月から鎌倉七里ヶ丘でスタートしたこども若者支援研究所は会員46名、カウンセリング104回、応援団会議12回、講演会2回(参加者162人)、講演会講師6回、取材2回、新聞執筆4回、叢書1巻発行、寄付金22万円が集まった。その他にも切手やお菓子等の寄付も頂いている。感謝いたします。この1年のタカラ(宝)は、多くの人との出会いと若者たちの自由闊達な発言である。往々にして年長者が語りすぎてしまう昨今だが、ここでは当事者を含め多様な年代の方々が自分を語り始めている。NPO法人アンガージュマン・よこすかを始めた11年前も同じ思いだったと振り返る。しかし更に衝撃的な出会いが訪れていると言っても過言ではない。こども若者の社会環境の改善は、辛く苦しくとも日々の生活の中での人と人との出逢いで進展していくと確信する。新たな年度へ、もっと多くの人との出会いを強く願っている。

コラム風

備前山中　別荘地
漕ぎ出したヨット

不登校・ひきこもりのこども若者の訪問を始めて8年。その一人、20代の若者Aさん。4年前に1度、彼の部屋に入り一方的に僕は話した。暗い部屋にPC画面が光る、布団に横たわる逆光の中の彼に僕は向き合った。そのAさんが母親と研究所に来てくれた。ファッショナブルな青年、顔とスタイルの記憶はない。父母を語り、母への依存と主体性のない自分を1時間振り返る。「ゲームやネットに逃避し自分を忘れようと10年ひきこもったが危機感を感じた。でも、どうしていいのかわからない。自分は病気なのではないかとも悩む」と。寒い雨の日だったが暖かな風を感じた。Aさんの独白そして彼の目線の先に明らかに光が見える。「Aさんは答えを持っている」と僕は実感した。2週に一度のカウンセリングを半年約束し別れた。前後して4年前永遠の別れをしたK男が僕の記憶に力強い風を起こし、3月17日神奈川新聞教育フォーラムにそのことを執筆した。そして未だ会えずにいるTさんに会いたいと願う自分がいる、4月の風を感じて、また新たな歩みを始めよう。

連載すぐそこにあること4　「他者への理解」

新舛秀浩33歳　某通信制大学在籍中　※2月号より「すぐそこにあること」のタイトルで連載執筆。通算6回

2月23日の篠原さんを招いた講演会は僕自身にとって非常に有意義であった。午前中に起床が難しい僕は途中参加で最後の言葉を述べる形で参加する予定だった。だけども、皆を驚かせたいと同時に存在を誇示したいがために無理して8時に起き9時に開場に到着した。理解ある応援団の方々が拍手をもって迎えてくれたことは今でも思い出すと嬉しく涙が出るほどだった。

というのも、先月号に書いた片想いの女の子にこのように言われた「12時まで寝てるのではなく“朝6時”に起きて明日に早朝のシフトのバイトの面接に行って。それが出来ないのならラジオ体操をして家の掃除をして朝食のチャーハンもお母さんにならって自分で作って！絶対昼寝をしたらダメー午後は自由でいいよ」との言葉だった。その人の名誉のために言っておくがこれは僕がどうしても本音を聞きたいからといった返答である。また普段は非常に優しく10歳上の気の弱い僕をいつも大切にしてくれている。(のろけてすみません笑)だからこそ、その人には精神疾患＆ひきこもりの辛さみたいなものを理解してくれてるのかなと思っていた。叱咤激励のような言葉に免疫がない僕にとってその人に言われた時には心臓をひとつきにされた気分でショックがあまりにも大きく立ち直れなかった。おそらくその人には悪気はなく僕のことを思って言ってくれたのだろうが、悪気がないだけにダメージも大きかった。

このような経験をして今思い出すのは篠原さんの言葉であった。我が子を失い失意のどん底であるはずなのに、本来憎むべき加害者にも思いをよせる姿勢。この思いとは違い僕は辛い状況を他者に理解させる、もしくは理解してもらうのが当然という稚拙な姿勢。本当に篠原さんには敬服するという言葉以上の気持ちになった。また、講演会の会場で篠原さんに声をかけた際にも僕を理解する姿勢で接して頂いた。

篠原さんのように、僕も、もう少し相手の立場に立って物事を考える成熟した大人になりたいと心から思っている。

それぞれの風コーナー○春らしい日が続いたと思えば今日は冷たい雨です。お手紙ありがとうございました。講演の様子、研究所叢書、とても興味深く読ませて頂きました。息子も「学校に行かれない僕は生きていても意味がない」と泣いたことがありました。震災が起きたころです。そして私の大切な友人(1人は中学の同級生)のお子さんが相次いで事故で命を落としていました。「学校行かなくても死なないよ～」「生きているだけで丸もうけ」(何かのドラマで見たセリフでした)と、本当は一緒に泣きたいのをこらえて笑って言ったのを覚えています。おかげ様で息子(高校1年生)は期末テストを機に登校を始めました。中学校の時は久しぶりに登校しても結局なじめずにいたようですが、高校はクラスでも部活でも「何もなかったように迎え入れてくれた」ようです。新入生(前号「それぞれの風」で紹介)の方も良い仲間に巡りあえますように。野球部は春の大会に9人で出場します。息子の回復が間にあってほっとしています。新入生の方に高校に入学したら、前期は毎週カッター漕ぎの実習です。体力をつけおいて、ぜひ高校生活で中学の分まで楽しい日々を過ごせますようにと、お伝えください。お元気で。(MH)

○真矢さんは生きている、ご両親によって生かされていると感じました。私がこの仕事に入ったきっかけも、娘のお友だちであったひとりの少女の自死でした。なんとか生かさなければとの思いからでした。不登校ができた娘でしたが、何年かたってから、いじめられていたことを口にしました。いじめは戦争中に軍隊という望まない場で理不尽に行われた行為があると思います。永田實さん(元代々木高等学院校長　横浜市不登校相談学級初代担任)は姑(しゅうとめ)の嫁いびりにも根底にいじめがあると言っていました。いずれにしても断たねばならないことです。滝田さんが新聞に書かれていたように、世の中は増々異なものを排除する方向に向かっています。それでも強く生きようとしていく人も確実に居ます。そんな人たちを『それでいい。そのままでいい』と言ってあげたいです。それが気付いた私たちおとなの役割だと思います。(島根三枝子　元地球屋主宰　元代々木学園カウンセラー)

右写真:岡本圭太さん　守田洋さん＆鈴木昌子さんが語るイベント(3月29日)リロード通信連載「へも通」第4巻発行記念

相談は右の日程でご連絡ください。時間は10時～16時でお願いします。訪問は日程調整します、往復の時間も必要です、ご相談ください(土曜日も訪問は受け付けたいと思います)。応援団会議は横須賀市市民活動センター午後2時～4時です。ご参加を

4月の開所日程(駐車場あります)			
3日(木)	休業	17日(木)	相談　予約済み
7日(月)	相談　予約済み	20日(日)	応援団会議
10日(木)	相談	21日(月)	相談
14日(月)	相談	24日(木)	相談